

波」であった。次の翌年8月19日の「北美濃地震」でトラブルがおきたが、「雨降って、地固まる」の理で、却って、地震命名のルールが定着した。

非常時の防災・救急活動は、万事、迅速でなければならず、地震の命名でも、遅疑・しゅん巡は禁物である。地震名は、震源地ないしは震災地の名にちなんで付けられるのが常であるが、その命名は当事者達の頭を悩ますことが多い。地震名が災害復旧費の獲得などに影響しがちだからである。「北美濃地震」と命名されたのは、震央が岐阜県北西端部で、当初は同県だけの被害が東京へ速報されたためであった。しかし、後日、福井・石川両県でも、同等以上の被害を生じたことが判明し、両県から大いに恨まれたのである。一昨年5月26日の「昭和58年(1983年)日本海中部地震」は、震源地からみて、「秋田県沖地震」などの方が妥当ではないかとの批判が強かった。しかし、北海道〜島根県の日本海岸全域に津波予報が出され、地震や津波の害は8道府県と韓国におよんだので、上記の公式名称もうなずけよう。

昭和40年8月3日に始まり、翌年5月16日に命名され

た、「松代群発地震(略称、松代地震)」は、「顕著な災害を生じた」とは、一概に言いがたい顕著な天変地異にも、必要に応じて、公式に命名するようになったこう矢である。

「地震の巣」での破壊地震の反復性を考慮し、昭和43年4月1日の「1968年日向灘地震」以降、地震名に発生西暦年代を付すことになった。昭和47年の「1972年12月4日八丈島東方沖地震」から、場合によっては、発生月日まで付すようになった。更に、昭和54年6月12日に元号法が公布、施行されたため、「昭和57年(1982年)浦河沖地震」(3月21日発生)から、地震名には和暦・西暦を併用することになり、現在に至っている。

なお、気象庁が公式に命名していない地震は、昨年12月17日の「千葉県中部の地震」のように、“の”を入れて呼ぶのが習わしである。公式名称ながら、例外的に“の”が入っているのは、昭和53年1月14日発生し、「1978年伊豆大島近海の地震」だけである。

(元気象庁)

都心は変わる

高橋伸夫

昨年11月に筑波大学の学生の野外巡検で金沢へ向かった。3泊4日の日程なので、内容はあまり欲張らずに、都市景観の観察と都市の内部構造に関して多少の調査を行った。周知の通り、金沢には浅野川沿いの武蔵ヶ辻地区と犀川沿いの片町・香林坊地区の二つの主要な商業地区がある。両者を結ぶほぼ1キロほどの国道沿いの細長い地区には、各種金融機関が集まって、オフィス街が形成されている。学生には、これら二大商業地区とオフィス街を中心とした土地利用調査を課した。2,500分の1のベースマップを手に、建物があれば1階の土地利用から最上階のそれまで、水平的にも垂直的にも調査を進めた。

私は、かつて都道府県別に銀行の貸出金と預金の統計を処理して、貸出金と預金を組み合わせた預貸率というものを求めたことがあった。その結果、東京・大阪そして石川の預貸率だけが100%を超えた。すなわち、全国でこれら三都府県だけが、貸出金が預金を上まわるオーバーローンの地域であった。この事実を念頭に入れて、武蔵ヶ辻から国道157号線に沿って香林坊地区まで歩くと、各種金融機関が集積し高層ビルが林立している様相がわかってくるような気がした。金沢は県庁所在地であ

るばかりでなく、北陸地方における広域中心都市として金融機能に特化している。その地域的表現として、人口40万都市としては規模の大きな金融街が形成されていると。

都心部に特定な機能が集まり、土地利用が特定な機能に純化してゆく過程には、前々から関心があった。人の紹介によって、町内会の会長をしているS氏に運よく会うことができた。彼は、香林坊に生まれて、いまでも女性用の「かつら」を販売する老舗を経営している。彼には、銀行や証券会社のビルにはさまれた自宅を中心とした街区の土地利用を、記憶の残る限り過去にさかのぼって再現してもらおうよう依頼した。すでに60歳を過ぎておられても、彼の記憶は鮮明であり、地図上に過去の街区の様相をつぎつぎに復原してくれた。

S氏の話のうちがうと、都心部にかつて居住していた住民の土地が、オフィス機能にとってかわられる過程にはさまざまな要因があることがわかった。都心部の地価の高騰によって、まず、そこに住む人びとには高い税金が課せられる。給与所得者などは、この税金の支払いが困難なため、他の土地へ早期に転出したという。小さな

商店も、自動車化に対応するためには、都心の土地を売って郊外に敷地を拡大し、駐車場を持った大型商店に変わるものが多かった。

高い税金と自動車化の浸透は、都心の住民に転居を迫るが、それに加えて、不動産業の都心部での土地買ひも無視できない。高地価の都心部は、不動産業者の格好の市場である。不動産業たちは都心部の地主たちに、土地の売却を根気よく迫るといふ。不動産業者は大きな面積がまとまるまで、土地買ひを続ける。それに年月がかかると、買ひ上げた小さな区画の地価は決して下落することがなく、むしろ、放置しておくだけでもその価値

は高まる。また、不動産業者の手にわたった土地を有料駐車場として活用することもある。彼らが首尾よく大きな区画の土地を自らのものにしたとき、そのような高価な土地を購入できる業種は限定されてくる。ある地理学者の計算によると、一定面積から最も収益をあげるのは、金融機関であるという言葉が頭にうかんできた。また、このような都心化が進むと、住民組織の一つである町内会の活動も困難になり、地域的な共同体意識はますます薄らいでいる、とS氏が述べた言葉は印象的であった。

(筑波大学)

オランダのクリスマスツリー

中島直子

成田空港から17時間、ヨーロッパの空の玄関オランダのスキポール空港へ到着した。時刻は午前8時頃だったが、まだ薄暗かった。沖合へと繰り返し行われた干拓事業によって国土を着実にふやしてきたオランダでは、空港も標高-20mの干拓地に立地していた。空港面積1,750ha、現在の成田空港の3倍以上の広さであるばかりか、将来の空港拡張のための用地も確保されているようだ。6本の滑走路をもつ空港のなかには、500haの営農地のほかに植林によるブナ・ポプラ・ヤナギ等の森林が帯状にできあがっていた。跳ね橋のかけられた水路が滑走路面より高いところにあるのを見なければ、スキポール(「船の難破する浅瀬」のオランダ語らしい)の意味やここが昔海底であったことに気づかなかっただろう。

首都アムステルダム空港間は15km、車で15分余の距離である。とても便利な国際空港だな、と考えながら都心へ向う途中、郊外の中高層集合住宅のそばを通った。クリスマスから4、5日たっているのに、日本では、にぎやかなクリスマスセールが終了した後に松飾りが付けられた頃である。しかし、ここではアパートのどの窓も白いレースのカーテンが左右に開かれ、窓をとおして豆電球が輝く小さなクリスマスツリーが静かに飾られているのが眺められた。この時期の日の出は9時頃、用水路も凍結する暗く寒い北緯53度に位置するアムステルダム郊外の集合住宅の開口部が、北海道の住宅の窓より、また東京のマンションのそれよりずっと大きく開放的に設計されているのに驚いた。また大きな窓をとおしてオランダ人の落ちついた住生活の一場面を垣間見た思いがし

た。こじんまりと飾られた窓辺は、一戸建住居においても勿論のことであり、街路に住居内のくつろいだ雰囲気伝えていた。

日本では洗濯物や布団がベランダに並べられることが多いだろうし、干物が無い場合には住居内が見えにくいように、保温効果がよいようにカーテンは閉じられることが多いだろう。色々な飾りをつけたクリスマスツリーは商売用や子供のために飾られることはあっても、クリスマスが過ぎればすぐに片づけられ、オランダやベルギーのように1月15日まで美しく置かれることはほとんどないだろう。ツリーはクリスマスと新年を迎えようとする人々の神聖な気持ちの印であり、西洋と東洋の差はあっても、日本人が門松や注連飾りを戸口に付けるのと共通のものと思われた。ツリーも門松も常緑針葉樹であり、特に戸口の左右に飾られたツリーは外見的にも松飾りと類似していた。

オランダの住居の窓辺が出窓になっている場合には、和風住宅の床の間に少し似たところもある。陶器やポインセチア・クリスマスツリーなどの鉢物が並べられているからである。しかし床の間が奥の間という住居内の接客空間に作られ、その家の客人のために置物や生花が飾られるのに対して、オランダの窓辺は内部空間にありながら、外部空間からの視線を配慮した空間である。この点において両者は異なっている。

住宅の窓辺やベランダを、あるいは住宅地の前庭にあたる空間を家族だけの閉鎖的な空間とするか、または外部空間と連続させるかによって、都市景観・都市生活は